

# 楽曲解説

[解説]宮澤 淳一

7/21(木) 第103回東京オペラシティ定期シリーズ

## モーツァルト (1756-1791) 交響曲第40番 ト短調 K.550

- I. モルト・アレグロ (約7分)
- II. アンダンテ (約14分)
- III. メヌエット、アレグレット—トリオ (約5分)
- IV. フィナーレ、アレグロ・アッサイ (約9分)

ヴォルフガング・アマデウス・モーツァルトの「三大交響曲」(第39～41番)の中央に位置する作品である。他の2曲とともにウィーンで1788年の夏に書かれ、生前に初演と再演がなされたと推測される。彼にとって例外的な短調の交響曲であり(あとは第25番ト短調のみ)、ここにこめられた強い情動と悲劇性は人々の心を捉え、考察の対象であり続けている(例えば小林秀雄は1946年の名評論『モーツァルト』でこれを「ほんとうに悲しい音楽」と評した)。

**第1楽章 モルト・アレグロ** ト短調、2/2拍子。ソナタ形式(2つの主題による提示部→展開部→再現部の構成)。序奏

なしにヴァイオリンが哀感に満ちた有名な第1主題を演奏し始める。第2主題は東の間の安らぎのような変ロ長調の旋律だが、これは第1主題の素材の派生でしかなく、音楽はもっぱら第1主題の旋律によって緊迫感を保ちながら構築されていく。

**第2楽章 アンダンテ** 変ホ長調、6/8拍子。ソナタ形式。冒頭の穏やかな第1主題と、呼び声のような第2主題(変ロ長調)で構成される。のどかな音楽のはずだが、ときに悲愴な面も垣間見せる。同音反復の八分音符が淡々と刻むリズムが印象的である。

**第3楽章 メヌエット、アレグレット—トリオ** ト短調、3/4拍子。“A→B(トリオ)→A”の三部形式。音楽は再び短調に戻る。厳しい調子の主題が鳴り響き、反復される。だがほどなく始まるト長調のトリオは柔和な世界で、管楽器の絶妙なアンサンブルが美しい。やがて音楽は前半の短調に戻る。

**第4楽章 フィナーレ、アレグロ・アッサイ** ト短調、2/2拍子。ソナタ形式。冒頭の上向きの分散和音風に始まる旋律が第1主題であり、「悲劇的」と形容したくなる激しい世界を表出させる。甘美な変ロ長調の旋律が第2主題として現れて提示部はまとまる。しかし展開部は第

1主題のみが音楽を支配し、再現部へとつながり、圧倒的な緊迫感をもって音楽は終わる(再現部では第2主題もト短調でしか現れないのは興味深い)。

[楽器編成] フルート、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン2、弦楽5部

## チャイコフスキー (1840-1893) 交響曲第4番 ヘ短調 作品36

- I. アンダンテ・ソステヌート(約18分)
- II. アンダンティーノ・イン・モード・ディ・カンツォーナ(約10分)
- III. スケルツォ、ピチカート・オスティナート、アレグロ(約6分)
- IV. フィナーレ、アレグロ・コン・フォーコ(約10分)

今回、モーツァルトの「悲劇性」を引き継ぐのが、「宿命」を主題とするピョートル・イリイチ・チャイコフスキーの交響曲第4番である。

この作品は、面識のない女性アントニーナ・ミリューコワとの結婚騒動を起こした1877年(37歳)に書かれた。「運命は避けられないし、このお嬢さんとの出会いには宿命的なものがある」と確信して失敗した結婚は、この音楽の主題と重なるが、アントニーナと知り合う以前に着手した作品だったことがわかっている(彼は7月の挙式後じきに新婦と別居してロシアを離れ、各地で創作を続け、12月26日、イタリアのサンレーモで

これを完成した)。

初演は翌1878年2月10日にモスクワで行なわれ、支援者となって間もないフォン・メック夫人に献呈された。夫人に宛てた手紙で、チャイコフスキーはこの作品を「私たちの交響曲」と呼び、「宿命」という標題があることを認めて仔細に説明を施した。以下それを含めつつ、各楽章を総覧しよう。

**第1楽章 アンダンテ・ソステヌート** ヘ短調、3/4拍子。ファンファーレによる「宿命」の動機で全曲は始まるが、この楽章は、弦楽器による切迫感のある下降旋律を第1主題、クラリネット独奏によるややおどけた旋律を第2主題とするソナタ形式である。チャイコフスキーによれば、「宿命」とは「幸福追求の情熱を妨げる、あの運命の力」であり、私たちは従順にして嘆くばかりだ。たとえ甘美な夢を見ても、「所詮は夢」であって、「人生とは、つらい現実と、幸福をめぐる束の間の夢とが絶えず交替しているにすぎない」し、安らぎなどない。

**第2楽章 アンダンティーノ・イン・モード・ディ・カンツォーナ** 変ロ短調、2/4 拍子。オーボエ独奏による憂愁あふれる主旋律と、弦楽器による副旋律が構成する複合三部形式である。中間部（ピウ・モツソ）では、クラリネットとファゴットがへ長調で活発な動きを示し、ほどなく主部に戻り、楽器間で主題が受け渡しされていく——。これは、憂愁を意味するロシア語「トスカ（タスカ）」の表現だとチャイコフスキーは述べる。つらい思い出、喜ばしい思い出と、遠い昔の記憶が次々に甦り、悲しみつつも甘美な気持ちに浸る様子だという。

**第3楽章 スケルツォ、ピチカート・オスティナート、アレグロ** へ長調、2/4 拍子。弦楽器群によるピチカートで始まるユーモラスな音楽である（ロシアの民俗楽器バラライカの合奏の模倣だの説もある）。そこに木管楽器によるロシア風の舞曲（イ長調）、金管楽器による行進曲（変ニ長調）が続く。やがて弦楽器に戻り、最後はすべての動機が再現して終わる。これは「寝入りばなの脳裡に浮かぶ脈絡のないイメージ」で、「いきなりほろ酔い気分の農民たちの絵が思い出され、町の歌が聞こえてくる」のだ。

**第4楽章 フィナーレ、アレグロ・コン・フォーコ** へ長調、4/4 拍子。3つの

主題による迫力あるロンド形式である。冒頭のにぎやかな第1主題、ロシア民謡の第2主題（「野に立つ白樺の木」）、浮き立つような第3主題。そして第1楽章の「宿命」の動機が再帰するが、第2主題との類似に着目したい。チャイコフスキーは説明する——自分に喜びがないのならば、お祭り騒ぎで喜びに浸る民衆の中に加わるがよい。すると「宿命」がまた現われるが、人々は気にもとめない。人々は「こちらが孤独で悲しんでいるの知らない」のだ。「悪いのは自分なことから、この世は悲しみだらけなどと言うべきでない。素朴で力強い喜びはある。他人の喜びを喜ぶがいい。とにかく生きていけるのだから」。

こうしてみると、まさにこの交響曲は「宿命」と対決し、それを克服するプロセスを描いた標題音楽だと解釈できるし、結婚騒動を含めた彼の人生との関連づけも可能だ。だが、これは、ベートーヴェンやショスタコーヴィチの第5交響曲とも通じる西洋的ドラマの音楽的展開であって、内的葛藤とその解決という筋書きに基づく創作であることも理解しておいてほしい。

---

[楽器編成] フルート2、ピッコロ、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、打楽器（トライアングル、大太鼓、シンバル）、弦楽5部